第8回 白川静漢字教育賞 選考結果

福井県では、本県出身の白川静博士の功績にちなみ、特色ある漢字教育を実践している方や、漢字文化の普及や生涯学習の推進に貢献している方、ならびに漢字に親しむ小・中学生を全国から公募、表彰しています。今回、11都府県から386点の応募があり、令和3年11月27日（土）、福井県立図書館において表彰式が行われました。

福井県教育庁生涯学習・文化財課 TEL 0776-20-0559 Mail syoubun@pref.fukui.lg.jp

選考委員（敬称略）

棚橋　尚子氏（奈良教育大学教育学部教授）
加藤　　徹氏（明治大学法学部教授）
後藤　文男氏（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所研究員）
伊与登志雄氏（福井新聞社特別編集委員）
津崎　　史氏（白川静博士長女）
豊北　欽一　（福井県教育長）

（小・中学生の部のみ）
宮下　奈都氏（作家）
髙橋　和代氏（福井県中学校教育研究会国語部会長）
髙間　春彦氏（福井県小学校教育研究会国語部会長）

※ 令和3年10月、福井県庁にて選考委員会を実施しました。

一般の部

一般の部　講評（選考委員：後藤 文男 氏）

2年ぶりに開催された「第8回白川静漢字教育賞」（一般の部）には、県外12点、県内4点、計16点の応募がありました。点数こそ多くはありませんでしたが、内容の濃い実践が全国から寄せられ、コロナ禍の厳しい状況の中でも日々実践に取り組んでおられる応募者の皆さんに、選考委員皆が励まされる思いになりました。

今年の応募の特徴は、漢字を覚えることが苦手など、発達の課題を持った児童にどのように漢字教育を取り組んでいけばよいのか、その奮闘の記録がいくつもあったことです。どれも個々の児童に向き合う真摯な思いと工夫に満ちたずしりと重い実践の記録でした。また、一度受賞された方々が、さらに新しい可能性に挑戦されている姿にも大いに励まされ、力を得た気が致しました。

この漢字教育賞も、最近はやや応募者が減少気味です。まだまだ眠っている実践は県内外に数多くあると思っています。何とか眠っている実践を掘り起こし、より多くの応募者が集う「漢字教育賞」へ発展してくれることを選考委員一同心から願っております。

最後となりましたが、改めて受賞者の皆さんにお祝いを申し上げ、今回の講評とさせていただきます。

一般の部　最優秀賞

（講評：後藤 文男 氏）

子どもの主体を起こす読み優先の漢字教育

滋賀県
子どもの主体を起こす漢字教育研究会共同代表
上野　芳樹 氏

1　実践の概要

漢字の意味理解を踏まえた読み優先の漢字指導を行うことで、全くひらがなを理解できなかった長男が教育漢字すべてを習得したという井上知子氏の子育て体験に基づき、「意味理解」「読み」の確立の上に「書き」の指導を行う読み優先の漢字学習の合理性を実証すべく、独自の教材を開発し、学校現場での実証研究を進めてきた。

2　実践の内容

(1) 主要3教材の開発

①「漢字音読名人」
文章を用い、文脈による漢字の読みの習熟を目的として作成した教材。

②「一日一漢字」
漢字の成り立ち・読み・文例・筆順をコンパクトにまとめたもの。『白川静博士の漢字の世界へ』（平凡社）に依拠し、解説・文例をイラスト入りで示し、筆順動画も加えた。

③「漢字書き名人」
「漢字音読名人」・「一日一漢字」と連動させる形で作成した書き習熟教材。「文を綴る中で漢字を使う」ことに重点を置いて作成。

(2) 実践の歩み

平成28年度、「漢字音読名人」を試作し、東近江市内有志の学級で試行。翌29年度には市内7校で取り組まれ、そこで評価を得て、現在は県下20校以上で活用されている。平成30年度、「読み」とともに「意味理解」が必須であることから「一日一漢字」を、更に令和2年度には「読み」から「書き」へ誘う「漢字書き名人」を開発。全教材を使って読み優先の漢字学習に取り組む学校も出てきている。

3　実践の成果

一連の全教材を使い、年間を通して指導した学級から「漢字の習得率や読書量が劇的に高まった」という事例も生まれている。我々の提唱する読み優先の漢字学習は、誰もが学びやすいユニバーサルデザイン教育の典型であり、子どもの主体を起こし仲間との協働を豊かに育む「教育」そのものであるという確信を深めつつある。

〈教材：漢字音読名人〉

〈教材：一日一漢字〉

講評　今回特別奨励賞を受賞された井上知子氏の「読み優先」の漢字指導体験を核に、どの子にも漢字を理解させるために、段階を追って漢字を学ばせる「漢字音読名人」や「漢字書き名人」など様々な工夫をしかけながら、学校全体、地域の小学校を巻き込み、何年もかけて継続的に広げられた、そのスケールの大きな実践の厚みが高い評価を得た。

小・中学生の部　優秀賞　漢字川柳部門

（講評：髙間 春彦 氏）

「明」

つきはえて　まどにさしこむ　あかるいよ
月映えて 窓に差しこむ 明るい夜

成り立ち：日は窓を表し、月をそえて、窓から月明かりが入りこむ様子（参考URL：漢字トリビア「明」の成り立ち物語）《https://www.excite.co.jp/news/article/TokyoFm_N5eAaQxi13/》

千葉県　いすみ市立岬中学校二年
吉田　美咲 さん

講評　吉田美咲さんは、「明」は窓からの月明かりであることに驚き、月の光を明るいと感じる古人の感性を、一つの情景として描き出しました。

「虹」

りゅうくだる　なないろのはし　あめあがり
竜くだる 七色の橋 雨あがり

成り立ち：空にかかる大蛇、すなわち竜であると見立てられている字であること（参考文献：『成り立ちとつながりで学ぶ　漢字シート35』）

京都府　立命館小学校五年
神野　莉沙 さん

講評　神野莉沙さんは、「虹」を竜と関わらせた古人の感性を面白く感じ、その面白さを「虹」という言葉をあえて使わず、なぞなぞ風に表現しました。

「進」

とりにとう　まよったときの　まいしんろ
鳥に問う 迷った時の my 進路

成り立ち：鳥占いによって軍隊の進退を決め、進軍させること（参考文献：『白川静博士の漢字の世界へ』）

京都府　立命館小学校五年
松田　星來 さん

講評　松田星來さんは、軍隊の進路という重要なものが鳥占いによって決められたことに驚き、その驚きを自分の「進路」に置きかえて表現しました。

小・中学生の部　優秀賞　漢字作文部門

（講評：宮下 奈都 氏）

漢字なんて

福井県　福井市明道中学校一年
酒井　翔太 さん

僕は漢字を書くのが大嫌いだ。

「なんで書き順なんてあるんだ。止め、はらいなんてどうでもいいじゃないか」とブツブツ言いながら漢字の練習をしている。

しかし、白川文字学の本を見るのは好きである。時に楽かく、時には勇ましく、時には残こくに思える字もあるが、とても神秘的だ。

酒だるを両手でささげもつ尊、神様に何を願ったのだろう。書くのは難しいが裁の十画目の長くなめに書く所が何ともかっこいい。何だか少しワルっぽく感じる紅の字も好きだ。王に従わないものを攻めうつ討もまた強さや厳しさを感じ、寸の所を書く時は、気持ちがすっきりする。

改めて好きな漢字を書き順通りに書いてみる。案外気持ちの良いものだ。漢字はアート。伝えようとする力も宿る。いいじゃないか。さあ、書くとするか！

講評　酒井翔太さんは、漢字についての内容よりもまず、非常に文章がうまかった。ほんとうに中学一年生かと疑いたくなるほど書き慣れていて、センスがよかったです。

願いがこもった「楽」

福井県　福井市木田小学校六年
堀　凌太 さん

僕の好きな漢字は、「楽」です。その理由は、みんなで楽しくずっと平和にくらしたいからです。調べてみて、「楽」の漢字のゆらいが思っていたのとはちがっていたので、おどろきました。「楽」という字の正字（旧字体）は、「樂」です。白の部分が鈴、その左右の糸は糸飾り。病気の時この手鈴を振って、病魔をはらう祈りを神に行ったことからこの字になったと言われています。音楽の「ガク」は、シャーマンが鈴を振って神を楽しませるので、音楽を楽しむという意味で音楽という漢字になったと言われています。ぼくはみんなで楽しく笑顔ですごしたいという思いで、この漢字を選んだけど神に祈りをささげて神を楽しませるという深い意味があることはまったく知りませんでした。ぼくには神を楽しませるということはできないけど、そのかわりに、みんなを楽しませて、毎日楽しく過ごしたいです。

講評　堀凌太さんの作文は、みんなで楽しくずっと平和に暮らしたいという、小学生らしい素直な希望がほほえましい作品でした。

おなかの中の赤ちゃん

兵庫県　宝塚市立宝塚小学校四年
川端　泰寛 さん

ぼくが、きょう味をもった漢字は「包」です。集まれ！わたしの漢字展に、書く漢字を考えていました。二学期になってたんにんの先生が来年の一月に赤ちゃんが生まれるので、十一月でたんにんの先生がかわると話しがありました。その事をお母さんに話すと、ぼくがおなかの中にいたときのことを話してくれました。

ぼくは大きな赤ちゃんで三千九百七十gもあって、病院の人たちもとてもおどろいていたそうです。生まれる予定の日よりも五日もおそくて、その間に成長したんだったと思います。お母さんのおなかの中がとても気持ちよくて、のんびりゆったりくつろいでいたからだと、ぼくの名前の漢字に「寛」をつけたそうです。

「包」の漢字はおなかの中に赤ちゃんがいる様子をあらわしています。お母さんのおなかの中でゆったりのんびりくつろいでいるんだなぁと思うと、かわいく見えてきました。

講評　川端泰寛さんの作文は、心があたたかくなるやさしい文章で、人柄のよさが滲み出ています。自田部門でも候補に残り、こちらも選考委員に愛されました。

第8回 白川静漢字教育賞 選考結果 小・中学生の部

小・中学生の部 講評

■自由部門（選考委員：髙橋 和代 氏）

自由部門には、八十五点の応募がありました。自由部門は、白川静博士や漢字をテーマに自由な発想で創作した作品を、考えたことや工夫した点などの解説を添えて応募するものです。

漢字に親しむ方法が、こんなにたくさんあることを「自由部門」に出品された作品が教えてくれました。毛筆の書の作品、創作漢字、絵漢字、漢字新聞、歴史書、歌詞、双六、そしてタブレットを用いた作品まで、実に多種多様な漢字の親しみ方と親しんでもらうための工夫や方法があるのだと感心しました。どの作品も独創性にあふれていました。そして、作品に共通していたのは楽しみながらこだわって作っているということでした。これからも漢字の謎を解き、楽しんで学んでいってください。次年度、この自由部門にどのような創意工夫にあふれた作品が出品されるのか、とても楽しみです。

■漢字川柳部門（選考委員：髙間 春彦 氏）

漢字川柳部門には、二百十六点の応募がありました。川柳は、漢字の成り立ちに関するものということで、応募用紙には、参考文献も含めて成り立ちを書くらんがありました。なので、小・中学生の皆さんは、成り立ちを調べたうえで、それを五・七・五の川柳に表しました。

今回の入選作品には、表意文字である漢字と作者との深い対話が感じられます。そして、それを一つの情景としていきいきと描きだしています。来年も、そういった作品に出会えることが楽しみです。

■漢字作文部門（選考委員：宮下 奈部 氏）

漢字作文部門には、六十九点の応募がありました。漢字にちなんだ四百字までの自由作文の募集でした。

応募作品全般としては、みなさんまじめで、漢字について興味を持ってよく調べているのが伝わってきました。とても前向きで健やかな作文が多かった印象です。また、自分のまわりのことや体験等と漢字を上手に結び付けていて、感じました。

一般の部 優秀賞

（講評：後藤 文男 氏）

「漢字を学び書字するって楽しい！」をめざして

福井県　福井市越廼小学校教頭
蓑輪　潤子 氏

白川文字学を活用して漢字を学ぶことは、児童の知的好奇心をくすぐり探究心をもたせることができるため、本県が推進する「楽しむ教育」の一つと考えられる。そこで、書写の授業の中で無理なく継続的に白川文字学を活用しながら漢字を学習する場面を模索するとともに、児童が意欲的に漢字の成り立ちを学習し、漢字や古代文字にそして書字することにも興味をもち意欲的に「楽しみながら」学習する授業を実践した。

まずは、全学年を通して、系統的にまた見通しをもって取り組むことができるよう「小学校書写における漢字学習題材掲載一覧（光村図書）」を作成した。これをもとに全学年で、自分の名前の漢字等成り立ちとその古代文字を書字する楽しさを味わった。

その他、校内の掲示板で季節や時事に関する漢字を紹介したり、お誕生日カードで名前の漢字の成り立ちを紹介したりするなど、児童や大人が興味を持つような取組を行ってきた。

これらの経験が、児童の長い生涯学習の一助、きっかけとなってくれると嬉しい。

講評　書写の授業と漢字の成り立ちを巧みにコラボさせながら、児童が生き生きと楽しんで学習している姿が目に浮かぶ、日々の何気ない授業の中にキラッと光る実践であり、自然体の中に質の高さを感じられる実践として高く評価された。第２回の優秀賞受賞者だが、さらに新しい可能性に挑戦されている姿に大いに励まされ、力を得た。

―僕だって私だってアプリがあれば漢字が覚えられるよ―

佐賀県　佐賀県立盲学校講師
福田由美子 氏

文字を書いたことがない、自分の名前も書いたことのない重度の知的障がいの生徒が入学してきた。手だてを工夫してひらがなが書けるようになったが、漢字も書けるように漢字アプリを作成した。顕著な効果が出たので書字困難な生徒にも役に立つと考えた。

作成に当たり配慮したことは、①一画一画書き順に従って線が出てくること②偏や旁を赤色で作成したこと③漢字の要素を同じ色で示すこと④既習の文字は黒色にすること⑤漢字の色別の要素を口誦しながら見ることである。（漢字アプリ作成に当たって、マイクロソフト社の書き順アプリを活用させていただいた）

アプリを使って指導した結果、重度の知的障がいの生徒は、文字をもったことで指導の内容がわかり音楽の才能が開花、佐賀県高校生ピアノコンクールで金賞を受賞した。読めるけれど書けなかったディスグラフィア（書字障がい）の生徒は、他教科の成績も上がり、自己肯定感が生まれ、少年の主張佐賀県大会で 10 傑に選ばれた。

講評　第２回に特別奨励賞を受賞されているが、今回「書字障がい」や「知的障がい」の児童生徒に自作の漢字アプリを使って取り組まれた実践が子どもたちに生きる自信や希望を持たせる上でも大きな意義を持つ実践だと高く評価された。

一般の部 特別奨励賞

（講評：後藤 文男 氏）

文章を基礎に置いた読み優先の漢字教育

京都府　大津少年センター思春期相談員
井上　知子 氏

長男が小学校入学後平仮名を扱えない事が判明。学校では平仮名から漢字へ、新出漢字は読み書き同時進行・一斉教育で進むためとても心配した。一方で、記憶はエピソードが基礎にあり感情が動くと深く刻まれる。それなのに記号である平仮名から教え、意味に少し触れただけで漢字単体を何度も書かせるのは記憶のメカニズムから外れている。そのため、エピソードがありイメージの湧く文を用いて行うのが最善と考えた。大人になって車を運転したい、だから字が必要と言う長男の動機を捕まえ、漢字の意味・形等で遊んで知的興味を喚起、新出漢字を含む文章をすべての教育漢字を用いて作成、未習漢字にはルビ打ちをし、文章が完全に読めるようになってから文章全体を書かせた。きょうだいがいても一緒にせず、親子で対等な一対一で行う事で子どもも親も心の安定を得た。現在 40 歳の長男はフランス語と英語を使って国際機関に勤務している。

現在は家庭への普及と、このポリシーを引継ぐ「子どもの主体を起こす読み優先の漢字教育研究会」で先生方と共に活動している。

学習に用いた漢字カード（2 年）

講評　発達障がいを持つ児童に効果的な家庭での漢字教育の貴重な実践記録である。最優秀賞の上野芳樹氏に引き継がれたように「読み優先」の漢字指導には応用できる普遍性がある。長年の地道な努力に深く敬意を表したい。

漢字の魅力を伝えるための授業づくり

福井県　鯖江市鯖江中学校教諭
真弓　恵子 氏

新学習指導要領の文言が、「指導する」から「理解し使うこと」へと変わり、生徒たちが今後の生活の中で、自ら考え効果的に表現できるようになるところまで、指導することが求められるようになった。

その中で、わが国の伝統文化である漢字の大切さや、いろいろな意味をもつ便利な文字の働きに気付かせ、文字を実生活の中で役立てることのできる生徒の育成を目指し、様々な実践に取り組んだ。【①教材の開発（10 分間の朝学習）　②筆ペン競書会（体育館での学年全員席上揮毫）　③学校祭の作品づくり（色紙に俳句）】

書く時間を増やし、いろいろな設定で、緊張感をもたせながら取り組んだことで、字を書くことへの抵抗感はどんどんなくなっていったように思う。授業後の感想をみると、書くことが身近なものになり、漢字のもつ魅力を肌で感じる生徒が増えてきている。今後も、我が国の伝統文化である漢字の素晴らしさを生徒たちに伝えていくため、学び続ける教師を目指していきたい。

講評　「筆ペン」の手軽さを武器に、「筆ペン競書会」や自作の俳句を色紙に書かせる授業実践等を通して、筆ペンを学校文化にまで高めようとする意気込みが伝わった。生徒たちもそれに応えるように、真剣に向き合い、文字を書くことを楽しんでいるように感じられた。

小・中学生の部 優秀賞 自由部門

（講評：髙橋 和代 氏）

「厚」の意味

福井県　福井市羽生小学校六年
富田　朋奈 さん

講評　富田朋奈さんの作品は「厚」の漢字の意味をタブレットを用いて紹介していくものです。クイズ形式で解いていくのでワクワクします。導かれるようにヒントを読み、それが新たな知識になっていきます。動きもあり、挿絵も分かりやすいので、漢字を楽しんで学べると思います。新しい挑戦と工夫がされた作品です。

ぼくの名前

福井県　県立嶺南東特別支援学校五年
中島　玲樹 さん

講評　中島玲樹さんの作品は、名前の一字である「中」を、書写の時間に初めて毛筆で表現したものでした。白川文字学では、「中」は軍の大将がいる中軍の旗を表します。はためく旗を、しなる曲線と元気のいいかすれで表現し、中心を貫いた真っ直ぐの縦画も堂々としています。一生忘れない揮毫になったことと思います。

ぼくの名前は十兵「衛」

福井県　福井市越廼小学校四年
田村十兵衛 さん

講評　田村十兵衛さんの作品は、自分の名前の漢字「衛」の古代文字を「書」と「落款」で表現したものです。城の周りを見守り隊がぐるぐる回っていたという意味を調べ、大切なものを守るための武器を見守り隊に持たせるなど独創的な発想が魅力的で、自分も家族を守れるようになりたいという想いも伝わってきました。

見て学べる漢字すごろく

福井県
県立高志中学校二年
竹野　遥香 さん

講評　竹野遥香さんの作品は「漢字すごろく」です。双六で遊んでいるうちにイラスト風に分かりやすく工夫された古代文字に触れ、その漢字がつくられた情景を想像しながら成り立ちを知ることもできます。双六をしながら漢字についての話題を広げたり、年齢を問わず繰り返し楽しみながら学んだり、使う人によって工夫ができる作品です。

白川先生と学ぶ甲骨文字 ～小四版～

福井県
県立高志中学校一年
冨永　真希 さん

講評　冨永真希さんの作品は、漢字の成り立ちを知ることで漢字の勉強が楽しくなることを伝える「小学四年生に向けた漢字の古代歴史書」です。墨絵や毛筆による揮毫があり、文章は手書きで大切なところは太さを変えて書くなど、分かりやすく伝える工夫がありました。「歴史書」に似せるために半紙を使うなど、楽しんで作成しているのが伝わってきました。